

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者 山本 智子

論文題目

中世東濃窯の研究

(論文内容の要旨)

本論文は、12世紀初頭から15世紀後葉の約400年間に亘って日常雑器である無釉の山茶碗と、これとセットとなる小碗・小皿（以下、山茶碗類）を生産した中世東濃窯について、その生産及び流通の状況を考古学的に研究し東海の中世窯における同窯業地の性格を明らかにしたものである。

第1章「中世東濃窯の編年研究史」では、中世東濃窯の主要生産器種である山茶碗類に加え、12世紀後半から13世紀前葉にかけて一部の窯で生産が行われた四耳壺をはじめとする水注・瓶子など小形壺瓶類の編年に関する先行研究を整理した。これにより、近年調査され第10型式期（14世紀中葉～15世紀前葉）に比定される中山1号窯跡の調査成果を山茶碗編年に反映させる必要があること、同窯の山茶碗に無高台碗が一定数含まれていることから有高台から無高台への変化を基準とする第10型式期と第11型式期（15世紀後葉）の型式設定を再検討する必要があること、東濃型山茶碗編年の年代観を決定する基準のひとつである小名田小滝9号窯出土の「文永三年（1266）」銘をもつ窯道具の蓋が第7型式期初頭に位置付けられていることから、尾張型山茶碗編年との間に年代的な齟齬が生じていることなどの問題点が明らかとなった。

第2章「中世東濃窯の編年」では、中山1号窯跡の出土遺物について再分類を行ったうえで、第4型式期から少量ではあるが大半の窯で生産が確認される無高台碗の型式設定を行なった。その結果、第10型式期はa・b期に細分可能で、第11型式期の無高台碗は第10型式期の無高台碗に連続し、第10b型式期に無高台碗の生産量が増加するという生産状況が明らかとなった。また、専用蓋の分類・編年を行うとともに「文永三年」銘の蓋について出土状況を再検討した結果、紀年銘資料は第7型式期に比定されることは間違いがないが、初頭に限定できる出土状況ではないという結論に至った。なお、この紀年銘資料を当該期初頭に限定しないことによって、

年代は13世紀中葉となり尾張型山茶碗編年との間に生じていた年代的な齟齬は解消された。

第3章「中世東濃窯の窯体構造」では、1980年代以降の開発ラッシュに伴い窯跡の発掘調査が増加し、その報告書などで部分的に研究が進められてきた窯体構造について、先行研究を整理した上で全時期を通しての分類を行い、その変遷を追った。その結果、中世東濃窯の窯体構造は縦断面図の形状からA～G類の7類に大別され、第4型式期（12世紀前・中葉）はA類、第5a型式期はB類、第5b型式期はC類を主体にD類が一定数、第5c・d型式期はC・Dを主体にE類が一定数、第6型式期はE類、第7・8型式期（13世紀中・後葉）はF・G類、第9型式期（14世紀前葉）以降はG類が主体に築かれることが明らかとなった。さらに第4～7型式期は平面形が「紡錘形」・「寸胴形」に大別され、第8型式期はこれに「倒卵形」が加わり、第9型式期は倒卵形が主体に紡錘形が少数築かれ、第10型式期以降は倒卵形のみが認められる。このことから、中世東濃窯の窯体構造は平面形により第4型式期以降少なくとも紡錘形・寸胴形の2系統が存在し、第8型式期に倒卵形が登場すると第9型式期以降はこの系統が主体となることが明らかとなった。

第4章「中世東濃窯の分布と群構造」では、中世東濃窯の範囲を確定した上で窯跡の分布密度、地形、河川などを考慮して地区設定を行なった。また、時期別に窯跡分布図を作成しその遷移を把握した結果、成立期である第3・4型式期（12世紀初頭～中葉）には可児市南西地区に窯跡が散在し、第5・6型式期（12世紀後葉～13世紀前葉）には南東方向に窯跡が増加・拡散し一部は土岐川を越えて大洞・土岐口地区で生産を行い、第7型式期（13世紀中葉）には生産のピークを迎えて北小木地区、高田・小名田地区、大畑・下半田川地区の三箇所分布が集中するが、第8型式期（13世紀後葉）には窯跡数が減少、第9型式期（14世紀前葉）にはそれまで生産の中心であった土岐川以北と土岐川以南の窯跡数が逆転し、これ以降後者が生産の中心地となるという動向を明らかにすることができた。なお、第8型式期の倒卵形は大畑・下半田川地区や北小木地区で登場し、当該地区は第7型式期に紡錘形のみが確認されることから、前者は後者の系統の集団から発展したものと考えられる。また、山茶碗の生産について4人程度の家族経営で年1回の焼成を前提に、窯跡の分布状況を加味して時期別に各地区の集団数を試算し、系統別の集団数や集団単位での移動状況をより具体的に把握した。

第5章「中世東濃窯製品の流通」では、東濃型山茶碗について、独占的に搬入される遺跡の分布範囲を主要流通圏、他の類型と数的に拮抗ないし他の類型が主体となる遺跡の分布範囲を2次流通圏としてその遷移を追いつつ尾張型山茶碗の主要流通圏の状況と比較した。この結果、

第3・4型式期には生産地周辺であった主要流通圏は第5・6型式期に北東方向へ拡大し、第7型式期には尾張型に代わって尾張北西部を主要流通圏に加え、第8型式期以降は縮小傾向にある尾張型山茶碗の主要流通圏を補うように流通量を維持させている状況が明らかとなった。

また、本論で採り上げたほとんどの中世遺跡は東山道をはじめとする街道沿いあるいはその周辺に立地している。そのうち、有力者の存在が指摘されている可児市の柿田遺跡では、失敗品である山茶碗類が複数出土していることから生産地と直接的な関係が窺える拠点集落と考えられるほか、郡上方面への玄関口とされる関市の重竹遺跡や長良川の中洲に位置し郡上街道にも隣接する岐阜市の芥見町屋遺跡、東山道飛騨支路の分岐点周辺に位置する岩田東A遺跡・岩田西遺跡・中屋敷遺跡なども有力者の存在が指摘されており、検出された遺構や中国陶磁やかわらけを多く含む器種構成などからこれらの遺跡も拠点集落と設定した。飛騨南端部の下切遺跡や大威徳寺跡、中濃北部の東氏館跡などで出土する東濃型山茶碗は、工人によって上記のような拠点集落へ搬入された後、別の運び手によってかわらけや中国陶磁とともに搬入された可能性も考えられ、遠隔地で確認される小形壺瓶類も同様に流通したものと推測される。

第6章「中世東濃窯の成立と展開」では、東濃窯の生産と流通を併せて六つの段階を設定した。第1段階（第3・4型式期／12世紀初頭～中葉）は中世東濃窯の成立期にあたり、可児市南西地区を中心に生産地周辺の需要を満たす程度の小規模生産を行った。第2段階（第5・6型式期／12世紀後葉～13世紀前葉）は窯跡が増加し分布範囲を南東方向に拡大させるほか、小形壺瓶類の生産も行われる。これに伴って流通範囲も拡大し、東濃地域を中心に中濃・飛騨南端部・信濃南西部の一部にかけて流通するようになる。第3段階（第7型式期／13世紀中葉）には生産のピークを迎え、窯跡数の増加とともにこれまでほとんど窯跡がみられなかった土岐川南の大畑・下半田川地区にも窯跡が集中するようになり、尾張型山茶碗の流通がみられなくなる尾張西部地域の需要を補った。第4段階（第8・9型式期／13世紀後葉～14世紀前葉）には前段階より生産規模が縮小し、特に土岐川以北で窯跡数が減少する。主要流通圏に大きな変化はみられないが、前段階と同様尾張型山茶碗の主要流通圏が縮小した範囲には東濃型が流通するようになり、尾張型山茶碗の主要流通圏内の遺跡においても東濃型の流通量は増加傾向にある。第5段階（第10・11a型式期／14世紀中葉～15世紀中葉）は、さらに生産規模が縮小するが、尾張型山茶碗の主要流通圏が消失することでほぼ全ての地域に東濃型山茶碗が独占的に流通するようになる。なお、第11a型式期には東濃窯に移動した古瀬戸工人によって古瀬戸系施釉陶器窯が築かれ、後Ⅳ期古段階の古瀬戸製品が生産される。このうち、内耳鍋と釜に

については出土分布が東濃型山茶碗の主要流通圏内に収まることから、山茶碗工人が流通の担い手となった可能性が高い。終末期である第6段階（第11b型式期／15世紀後葉）には山茶碗類が供膳具としての機能を失い、灯明皿を強く意識した形状へ変化する。機能が変化したことに起因してか、主要流通圏も大幅に縮小し、生産地周辺と中濃・尾張北部を中心に流通するに留まる。この段階をもって中世東濃窯の山茶碗専焼窯は終焉を迎えるのである。

中世東濃窯は古代末期灰釉陶器生産と直接連続せず、短期間の断絶期が認められる。隣接する瀬戸窯や猿投窯では灰釉陶器窯に連続する形で中世窯が成立しており、その後も継続して窯業生産を行なっている。一方、立地的にも東濃窯に近い古代からの窯業地である尾北窯では、灰釉陶器窯に連続して中世窯が成立するものの、第5型式期以降の窯跡は認められない。さらに、尾北窯の初期山茶碗と東濃窯の第3型式期後半に比定されるほうの木窯のものを比較すると、同時期の尾張型初期山茶碗より形状的に近く、形式的に前後関係にあるものと考えられることから、中世東濃窯は尾北窯からの工人移動によって成立した可能性が高いといえよう。

また、15世紀末に成立する瀬戸美濃大窯の窯体構造は、15世紀後半の東濃型山茶碗専焼窯と古瀬戸焼成窯それぞれの特徴を併せもつこと、古瀬戸系施釉陶器窯は1基の窯炉に対して複数の工房が築かれ工人集団による共同経営が行われていたこと、15世紀後葉に瀬戸窯へ帰還した古瀬戸焼成窯の製品のなかに東濃型の第11b型式期に比定される無釉の灯明皿が認められること、成立期の大窯製品のなかにもそれが含まれることなどから、東濃型山茶碗工人は15世紀末の瀬戸美濃大窯成立期には完全に施釉陶器生産のなかに吸収された可能性が高く、これをもって中世東濃窯の山茶碗専焼窯は廃絶するのである。

さて、東濃型山茶碗工人の経営形態については、工人の居住地が窯跡の周辺に認められないこと、窯跡内に炭焼き窯が築かれる場合があること、小名田西山1号窯跡では工房址に接する形で炭焼き窯が築かれていることを踏まえ、窯跡の分布と原料となる土岐砂礫層・土岐陶土層の分布を比較したところ、窯跡の大部分がこれらの分布域に重なっている状況であった。当時の荘園配置にも全く左右されずに分布が移動していることから、東濃型山茶碗工人は有力者の支配を受けず、農業や炭焼き窯などと兼業して窯業生産を行なっていた可能性が高い。

一方、第2段階の小形壺瓶類併焼窯と荘園配置図を比較すると、池田御厨の範囲内の東側に位置し高田勅旨田に隣接する住吉・明和地区および高田勅旨田に位置する丸石地区でA・C系統、丸石地区の土岐川を挟んで南側に位置し土岐庄にあたる大洞・土岐口地区でC系統、池田御厨の西側に位置する多治見市北西地区と北小木地区でB・D系統の生産が行われている。日

常雑器である山茶碗類とはその性質が異なるうえ、明和・住吉地区に位置する赤根曾窯跡では「大一」「大二」の印文をもつC系統の小形壺瓶類が採集されていることから、同窯跡が立地する池田御厨への奉納品であるという指摘もある。これらの状況から、有力者などに全く関与されない山茶碗生産に対し、小形壺瓶類の生産については有力者の需要によって行われた可能性が高い。

今回設定した段階別に尾張国の窯業生産を担った瀬戸窯・猿投窯・常滑窯の動向と比較すると、第1段階の山茶碗生産は東濃型が瀬戸窯・尾北窯、尾張型が猿投窯・常滑窯を中心に行われており、東濃窯の生産規模はかなり小さかったようである。第2段階には東濃窯の生産規模が一気に拡大し、東濃型山茶碗生産の中心地となる。また、この段階で尾張国内の窯業生産は転換期を迎え、瀬戸窯では古瀬戸前期様式が成立し、尾張型山茶碗工人が猿投窯から瀬戸窯へ流入し両者が共同経営を行うようになり、常滑窯では大形壺甕類の生産をほぼ独占するようになる。第3段階に入ると東濃窯は山茶碗類の生産に専念し、尾張型山茶碗の生産拠点は完全に内陸部の瀬戸窯・藤岡窯に移るが、この影響で流通が滞る尾張西部地域などには東濃型が搬入されるようになる。第4段階以降も尾張型山茶碗の生産規模が縮小していくのに対し、東濃型山茶碗はその生産規模を維持している。また、第9型式期後半から第10型式期（14世紀中葉から15世紀中葉）にかけて尾張国で施釉陶器生産が瀬戸窯、大形壺甕類や片口鉢Ⅱ類の生産が常滑窯に集約されていく。これに対し、山茶碗生産は瀬戸窯・藤岡窯で尾張型が少量みられるが、その中心は東濃窯が担うようになるため、ある意味山茶碗生産も東濃窯に集約されていくとみることがもできる。ただし、山茶碗はあくまで日常雑器であり、管掌者をもち全国規模の需要に応える性質をもつ瀬戸窯や常滑窯のように意図的に生産がコントロールされているとは考えにくく、瀬戸窯・常滑窯が施釉陶器や大形壺甕類の生産を優先することで不足した山茶碗を東濃窯が補っていたと考えるのが現実的である。日常雑器である山茶碗類を主要製品とした中世東濃窯は、在地の需要に応え続けた地域密着型の性格をもつ窯業地であったと言える。